

# 開発に揺れる中国湖南省武陵源

足立原 貫

(短期大学部農業技術学科生物生産専攻)

## 問題の背景と課題の焦点

「改革開放政策10年の歩みの調査」に始まる湖南省農村の変容を追う一連の現地調査<sup>1)</sup>を進めていく過程で、新たな問題に遭遇した。湖南省西北部の武陵源一帯における、観光開発を主軸とした巨大プロジェクトの展開をめぐる諸問題である。

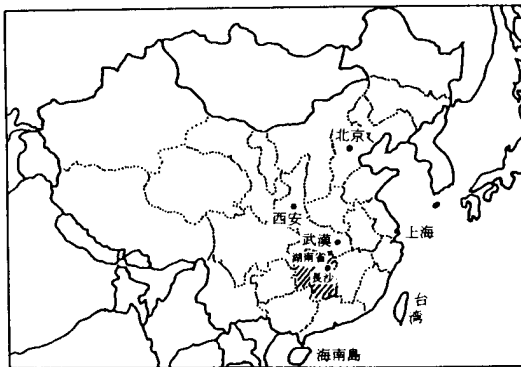
少数民族居住地域の武陵源の奥地で、張家界の絶景地が「発見」されたのは1970年代の中頃と伝えられている<sup>2)</sup>。それまで、その地域の住民たち以外には知られていなかった秘境「張家界」が、1984年に一般公開されると「桂林などは比べものにならない」との絶賛の声とともに、国内外の識者の関心を集めた。開放路線の熱気が高まり始める矢先、中国の当局者たちが外貨獲得をねらって、「張家界」を売り出す大規模な観光開発を意図したのは、当然の趨勢であったであろう。

少数民族住民の教育水準向上と武陵源の地場産業育成の拠点として1985年に創設された武陵大学には、旅游学科\*が置かれ、いち早く域内の空港建設\*\*計画が公表された。

\*…観光ガイド養成をねらった学科であったが、1994年に廃止された。

\*\*…「張家界空港」1991年11月に着工、1994年7月18日に開港された。

それとともに、台湾、香港、シンガポール等からの外貨の大量流入と観光施設の建築ラッシュが沸騰した。

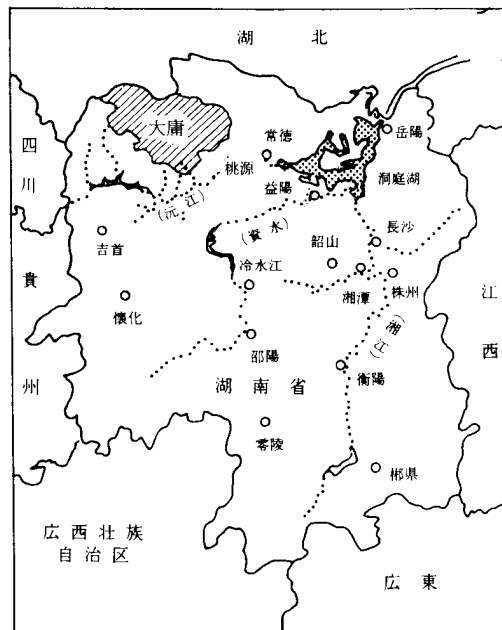


図一 中国地図 (斜線部が湖南省)

国内外からの観光客は1992年に100万人に達し、1993年には170万人を超えた。(大庸市旅游局調べ)

このような大規模で急激な開発の進展は、地域の風光を一変させ、農村・農業と住民生活を激変させずにはおかない。連動して、さまざまな環境問題を惹起している。それらの事態を悪化させていくと予測される開発の「負」の影響を、可能な限り早期段階で防止しようとする対策に有効な資料の収集は急務である。現地政府への協力のため、1979年以降継続してきた湖南省の農村農業問題をめぐる諸調査に、環境問題の視点を加えた現地調査を、1992年～1994年、下記の項目について実施した<sup>3)</sup>。

1. 武陵源の社会・経済の現況。武陵源を対象とする地域開発とくに張家界、索溪峪、天子山の「3点セット」を目玉とする観光開発プロジェクトと開発をめぐる地域経済の動向。
2. 予想をはるかに上回るスピードで進行しつつある武陵源の観光地化を、住民はどのように受けと



図二 湖南省地図 (斜線部が大庸市)

めているのか、その意識、営農、生活の変化。

### 3. 武陵源の自然環境諸相の現状<sup>4)</sup>。とくに植生、鳥獣、昆虫、および水質。

本稿は、上記の項目のうち、開発の悪影響が最も懸念されている自然環境諸相について、予備調査で得た基礎資料から、主に野生生物をめぐる部分を素描したものである。

## 武陵源の概要

### 1. 位置・面積

湖南省の西北部「湘西土家族苗族自治州」に隣接する大庸市（現在は張家界市\*）のほぼ中央部の山地一帯（東経110°21'~110°39'、北緯29°18'~29°25'）に張家界、索溪峪、天子山、それらに連なる数多の景勝地があり、広大な風致地域を形成している。武陵源はその一帯の総称である。海拔262m~1334m。

\*…国際観光地として「張家界」の知名度が高まったことを理由に1994年4月4日、「大庸市」から「張家界市」に改称されているが、本稿では、調査時における名称の「大庸市」を使用する。

総面積は522km<sup>2</sup>。そのうち張家界国家森林公园が130km<sup>2</sup>、索溪峪風景区が147km<sup>2</sup>、天子山風景区が67km<sup>2</sup>、その他25km<sup>2</sup>で、風致地域は約370km<sup>2</sup>に及ぶ。耕地面積37,689畝\*\*（内、水田26,743畝）、森林面積261,106畝。

\*\*…1畝(ム)≒6.67アール

### 2. 行政区画

1988年末、それまで湘西土家族苗族自治州管轄下の県級市\*であった大庸市と桑植県が合併し、それに常德市管轄下の慈利県を加えて、湖南省直轄市の大庸市が



図-3 大庸市行政区画図

誕生した。武陵源は「区」として大庸市管轄下にある。

\*…行政区画は、一般に「省」「地区」「県」あるいは「県級の市」の3段階構成であるが、「省直轄市」は「県」より上位にあってその中に「区」や「県」を抱える。たとえば湖南省大庸市慈利県、湖南省大庸市武陵源区、湖南省常德市桃源県など。

大庸市管轄下の区は、永定区と武陵源区である。

武陵源区内の行政単位は、張家界国家森林公园管理処、索溪峪鎮、天子山鎮、中湖郷、協合郷の1処・2鎮・2郷で、その域内に38村と1農場がある。

### 3. 人口・住民

大庸市統計局統計によると、1992年末の武陵源区の総戸数は11,800戸、人口は40,300人（その内、農業人口33,700人、非農業人口6,600人）

住民は漢族のほか多くの少数民族であるが、総人口の71.4%を、土家、苗、白、を主とする少数民族の住民が占めている。

### 4. 気候

年平均気温16.3~16.8°C、1月平均気温4.8~5.1°C、7月平均気温22.5~23.7°C。これまでに記録された最低気温-5.5°C、最高気温46.1°C。無霜期間267~275日。

年降水量1,382.1~1,427.3mm、降水は主として4~8月にある。とくに5~6月は多雨の季節で、年降水量の30%を占めている。

相対湿度の年平均は77%~79%。

このような温暖・湿潤の気候は、植生の繁茂に極めて有利な条件となっている。

### 5. 景観

約3億8000万年前に海洋から隆起し、幾多長年月にわたる地殻変動と風水の浸蝕によって形成された<sup>5)</sup>、と推定される武陵源の自然風致区は、「景勝地」という表現では全く月並に墮し、他の表現の言葉が見当らないほどである。

とくに張家界は、天をつくように聳え立つ巨岩奇峰が林立している間を溪流の清水が縫い、文字通り「青山流水」「万水千山」「峰三千、水八百」が誇張でなく実感できる絶景地である。四季折々「千姿百態」と言われる様々な形貌の巨大な岩石が数千、連綿重畳と岩石の林のように続いている景観は「絶景」の表現にふさわしく、山水画の絵巻物に描かれる世界を、現実眼前に見るようである。

## 6. 住民生活

武陵源一帯は内陸山間の奥地で他の地域との往来も極めて少なく、近年に至るまで、現代社会から隔絶されたような状態であったと見られる。石灰岩質の瘠薄な土地で、農作物の収量も低い農耕によるほとんど自給自足の生活を営み、他に生計を立てる方途もなかったため、この地帯が“発見”されて貨幣経済に巻き込まれていく過程で、所得レベルが極めて低い「貧困地帯」と指定されることとなったのは当然であった。

中国では、全国各地域間の貧富の格差を見るため、特定の経済指標をもって、「貧困地帯」を区分している。現在使用されている指標は、1985年に住民1人当りの純年収が200元以下で穀物配当量が225kg以下の県を「貧困県」と指定したものである。この経済指標によると、1986年の時点で、大庸市は、湖南省全省の「貧困県」30の中に含まれていた。

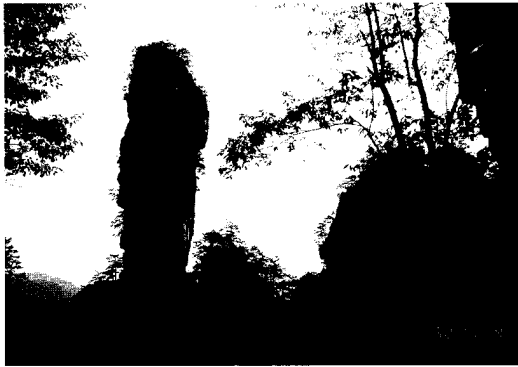


写真1 張家界の風光  
彫刻建造物を思わせる奇岩



写真2 張家界の風光  
随所に散見される“天然の妙”



写真3 張家界の風光  
林立する奇峰

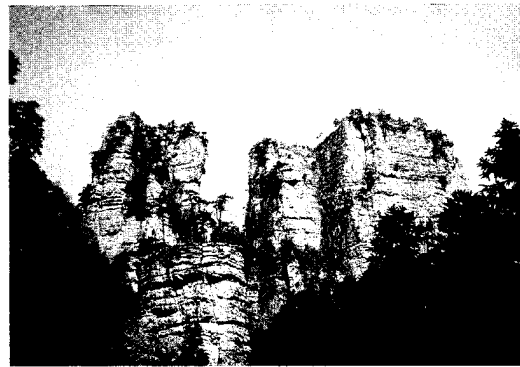


写真4 張家界の風光  
行手に立ちはだかるような巨岩

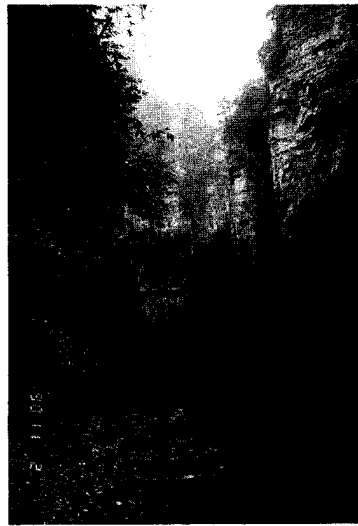


写真5 張家界の風光  
金鞭溪の清流

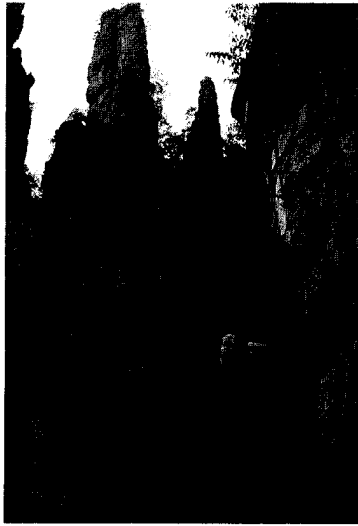


写真6 天子山の登山路  
奇岩群の裾を巻くように往来



写真7 天子山の登山路  
歩きながら見上げる数多の奇岩



写真8

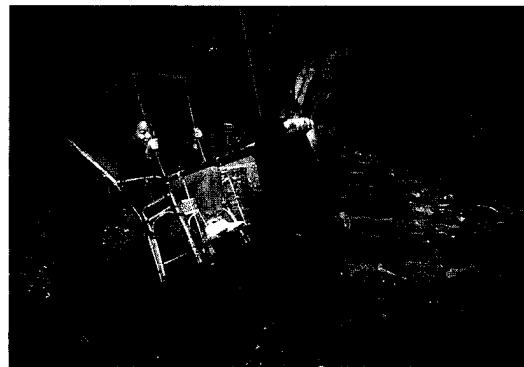


写真9

手っとり早い現金収入を求める少数民族の住民たちは  
農作業をやめて「かごかき」や「民族歌舞」に忙しい



写真10 武陵大学で研究用に捕獲飼育している  
娃娃魚(おおさんしょうお)



写真11 武陵大学側面

当時、大庸市は湘西土家族苗族自治州管轄下の「県級の市」であり同じ管轄下の桑植県と常德地区（現在は常德市）管轄下の慈利県のいずれの県も、「貧困県」に指定されていた。武陵源一帯が「貧困地帯」であったということである。

## 変貌する武陵源

およそ貨幣とは縁遠く、自然経済状態にあった少数民族居住地区の武陵源一帯が、現代の経済社会に組みこまれて、1980年代に入ると急速に変貌し始めた。

1990年代初頭において、湖南省政府はもとより中国政府も、武陵源に重大な関心を寄せている<sup>6)</sup>。

「全国全省の改革・開放政策に従い、当該地域経済の、市場経済への移行が促進されている。とくに、地域をあげて、観光事業をリード産業として育成し、経済成長の加速をはかろうとしている」<sup>7)</sup>

地域経済の成長結果は、1990年代に入って著しく目立ってきた。

1992年における大庸市の総生産額は13億7,442万元に達し、前年比伸び率8.1%、対1988年比31.3%増を示している。このうち、第一次産業6億7,488万元、第二次産業3億2,728万元、第三次産業3億7,226万元。大庸市全域についてのこれらの数値から、慈利県、桑植県を除いて、大庸市区（永定区と武陵源区）についてだけ見ると、総生産4億6,773万元、そのうち第一次産業2億1,578万元、第二次産業8,929万元、第三次産業1億6,266万元である<sup>8)</sup>。

武陵源一帯への国内外からの観光客数は、1992年に152万人を記録し観光収入は5,500万元に達した。国外からの観光客数は4万人を数え外貨収入は80万USドルであった。

張家界の貧困地帯とされていた山村地区では、この5年間に、山地資源を活用した林産品の開発と農業生産技術の向上などによって、住民生活が向上し、50万人の農村住民が貧困線を脱出したと報告されている<sup>9)</sup>。大庸市政府の1992年末資料によると、調査農家230戸（常住人口960人）について見た1人当り平均純年収は下表のようである。

農村住民の年収（1992年）

	調査農家数 (戸)	調査農家の 常住人口 (人)	1人当り 平均純年収 (元)
大庸市	230	961	612.4
大庸市区（永定区 武陵源区）	100	417	773.5
慈利県	70	285	599.1
桑植県	60	259	498.8

## 開発の現況

張家界、索溪谷、天子山、の景勝地を核とする武陵源の風致区は、湖南省が今後の支柱産業の一分野として育成をはかっている観光産業の重点開発地域である。とくに「張家界」の名を世界に売りこもうとする開発プロジェクトは、湖南省西北部地域開発のモデルとして重要視されている。

風致区の整備は、その母都市となる大庸市を中心とした観光地区の建設整備と並行して進められている。

1989～1993年の5年間に、大庸市は社会資本整備のため総計20億元を超える投資を計画し、そのうち8億7000万元は1993年の投資である。主な建設整備項目として下記のものの特記されている。

- ① 空港（ボーイング737が就航可能）
- ② 鉄道の張家界駅
- ③ 澄潭貯水ダム
- ④ 魚潭、慈利、桑植の3発電所（合計10万kW）
- ⑤ 道路（大型2車線の道路、5路線）
- ⑥ 自動電話交換機
- ⑦ 光ファイバー通信とマイクロ波通信の施設

以上のような各項目の完工とともに、観光客の招致も容易となり、「張家界」の知名度の向上との相乗効果によって、武陵源の国際観光地化は一層促進される。

「そのことによって、観光事業をリード産業とする地域経済の発展は、期待どおりに実施できる」と湖南省政府担当者<sup>10)</sup>は展望を語っている。

大庸市政府は、20世紀末までに観光諸施設を先進国並に完備し、世界に誇れる美しい自然の宝庫を抱えた「国際観光都市の建設」を地域発展の基本目標としている。その具体的な目標値として、20世紀末の観光客を、国内から300万人、国外から25万人（1992年実績では、それぞれ152万人と4万人）とし、観光事業による収入を4億5000万元、外貨獲得1億USドルと見込んでいる。目標を達成するための課題として、次の4点があげられている<sup>11)</sup>。

1. 外資導入による観光施設の拡充
2. 社会資本の充実
3. 国際化に対応し得る地域行政のレベルの向上
4. 高級な観光事業管理のための人材育成

## 野性生物の“宝庫”

開発の展望がバラ色に描かれる一方、開発によって地域にもたらされる「負」の結果が大きな問題となっ

てくる。農村・農業の激変に伴う諸問題や、環境をめぐる諸問題である。とくに生物相への悪影響が懸念される。

武陵源の巨大観光開発によって惹起されると予測される数多の地域問題のうち、環境問題がとくに注視されるのは、張家界をはじめとする絶景地はまた、天然林や野生動物の宝庫であるからにほかならない。

## 1. 武陵源の植物

武陵源一帯の生物資源調査<sup>12)</sup>によると、域内で採集された植物は、概略、次のようである。

羊歯類…37科、239種

木本類…95科、254属、483種(含、変種)

これは、湖南省内で確認される木本植物の種の24%、属の58%、科の78%を占めている。

6種以上にわたる科は、樟科、山茶科、など6科あり、中国特有の白豆杉、珙桐、香果樹、銀鵲樹、など12属が見られる。このほか、東アジアから北アメリカの間に点在しているもの28属、東アジアに広く分布しているもの48属がある。

多種の精華樹の中には、国家重点保護植物の一級に指定されているもの1種(珙桐)、二級に指定されているもの5種(香果樹、杜仲、など)三級に指定されているもの7種(青檀、銀鵲樹、など)、湖南省保護植物に指定されているもの10種、と国内外の専門家たちが注目する貴重な木本植物が確認されている。

草本類…ほとんど禾本科で86%を占めている。他に豆科が6.2%。

優勢草種は、白茅、芒、細柄草、野古草、などである。

植生状態としては、草本類だけのもののほか多く見かけるのは、牡荊、白欒などの灌木との混在で、そのほか、猕猴桃など、つる性の植物との混在も見られる。

薬用植物類…天然植物資源として漢方薬材に重用される植物は、一帯で500余種の存在が確認されている。一般によく知られているのは、杜仲、厚朴、黄柏、黄蓮、玄参、天麻、木瓜、などであり、特殊なものは、馬蹄香、虎耳草、青魚胆草、白花地丁、紫花地丁、などである。

## 2. 武陵源の動物

貴重な野生植物の宝庫としての天然植物公園は、ま

た、貴重な野生動物の宝庫としての天然動物公園でもある。武陵源一帯は、近年まで“秘境”とされていた地域であるだけに、幽幻な巨岩奇峰、緑豊かな野生動物群に守られてきたように、人類に荒らされることもなく、多種多様な鳥類、獣類、魚類、虫類が生息し、繁殖し、生存をつづけるには、絶好の地であったであろう。そのため「珍貴」と表現されるような様々な野生動物が発見されている。

例えば、白水鶏、紅嘴相思鳥、猕猴(赤毛猿の一種)、水獺(かわうそ)、麝(じゃこうじか)、貉、娃娃魚(大型のさんしょううお)

武陵源に生息している野生動物の特徴は、中国の生息地分類で、華中区系の典型である。

陸生脊椎動物の82.43%は中東洋界種が占めており、14.63%が古北界種である。それらのうち、とくに注目されるのは、次のようなものたちである。

獣類…獐\*、毛冠鹿

鳥類…紅腹錦鶏、灰胸竹鶏\*\*、棕頸鉤嘴鷓\*\*\*

爬虫類…尖吻蝮

両生類…華南湍蛙

\*…「のろじか」、偶蹄目、鹿に似ているが、小型で角がない。背は黄褐色、腹は白色、毛は荒い。

\*\*…青白い胸の「やまうずら」の一種。竹林に生息する。

\*\*\*くびが茶褐色で、「ほおじろ」の一種。

これらは全て華中区系の個有種である。

在来の個有種ではなくて、北方から侵入してきた動物が、狐、豺(やまいぬ)、青鼬、小林姫兎、黒線姫兎、松省鷹、林鶴、北草蜥、等々である。

このほか、西南区系のもの、華南区系のもの、華中・華南共通区系のもの、が混在し、武陵源の動物分類区系は極めて複雑だが、過度的な状態であり、今後、華南区系の動物相に一層近づいていくと考えられている。

虫類

武陵大学の資料から20目、81科、数百種にわたる昆虫類を主に、多様な虫類の生息状態がうかがえる。その中には、「珍種」として専門研究者たちによって注目されているものも少なくない。

## 抱かれる危機感

観光開発によって上述の“生物宝庫”が危険にさらされていることは明らかである。

野生植物や動物たちの危機は、現地のいたるところで感得される。

危機をもたらす“元凶”として誰にも直ぐ指摘されるのは「観光施設の急造」と「観光客の急増」である。

観光地化を急ごうとする当局側の意向と開放路線に乗って流入した外資によって、建物、道路、トンネル、等の建設工事が同時平行、一気に進められている。そのため、天然樹の伐採、岩石の破碎、丘陵斜面の掘削、等々が無秩序に強行されているようである。

中国の社会制度から見れば、本来、土地は国有で私益の用に供されることはないはずである。しかし、土地の使用権の売買が可能となっているため、利潤のにおいのするところであればどこにでも進出してくる外資の利権屋が横行することになる。

しのぎをけずる利潤獲得競争は、いきおい、乱開発、大規模な自然破壊、をもたらし、武陵源の自然宝庫を揺るがすこととなる。

このような、いわば“ハード”面からの危機の到来の一方、“ソフト”面からの危機も深刻である。

「押し寄せる」という表現が誇張でなく激増する観

光客は、それなりの応分の散財をするため、地域の貨幣経済を促進し、活性化し、住民の所得も向上する<sup>13)</sup>。そういう現象はこれまでの一般経済常識では正当化されるのであろう。「しかし」と、考えこまねばならない。

観光客たちが捨てるゴミによる汚染は、また、凄じい限りである。不要物の廃棄などという態様ではなく、まさに「ゴミ散乱放置」と言えようか。歩道上、道端の草木の間、岩陰、斜面の林間、さらに、溪流の中にも、タバコの吸殻や空箱、紙屑、スナック類の空袋、ジュースの空缶、ペットボトル、等々が投棄されている始末である。警告の立札やゴミ箱が置かれていても、まるで無視されているようである。

こういう可視的なことのほか、激増する宿泊施設等からの廃水や排煙による汚染も避けられない難題である。

「乱開発による水土流失等の環境破壊」「マナーの悪い観光客の激増による環境汚染」これらによって、武陵源一帯の自然環境相は危機に直面している。貴重な景観や、そこに生息している野生生物類を失うことになれば、観光そのものの“資源”を失う結果になると



写真12 果物の皮を棄てるなという警告立札の下にミカンの皮が投棄されている。



写真14



写真13 観光客用の遊歩道施工で無残に破碎された自然石



写真15

菓子類の空袋やジュース類のペットボトルが、ところきらわず投棄されている。

いうことに当事者たちは気づかねばならない。

### あとがき

—「地球呼喚緑色、人類渴望森林」—

1991年11月4日～11日、大庸市と張家界国家森林公園を舞台に、森林生態系の保全と緑化思想の普及をテーマとする第1回国際森林祭「'91中国湖南張家界国際森林保護節」が開催された。上掲の「地球は緑を呼び、人類は森林を渴望する」は、そのときのスローガンである。

中国では1970年代末から、洞庭湖の埋立開発や湖辺工場排水をはじめ、各地の環境問題を取り上げる識者たちの声が強まり、80年代初頭から、環境問題関係の法律制定や行政機関の設置が進んだ。それらを実効ある施策とするために重要なことは、問題への関心を大衆レベルにまでどのように広げていくかである。82年に開始した植樹祭などのイベントをまじえた緑化事業との結びつきで、折にふれては環境問題意識の高揚をはかるという具体的な努力が重ねられ、環境問題専門紙も、少なからず発行されている。そういう状況を背景に、「'91中国湖南張家界国際森林保護節」が開催された。期間中のプログラムにシンポジウムが企画され、筆者は辰濃和男氏<sup>14)</sup>とともに参加の招請を受けた。

そのとき筆者にとっては、1989年、1990年に次いで3回目の張家界であったが、すでに前2回の張家界とは急変していた。「森林保護節」とは言っても、主催者側の意図は、国際観光地をめざす張家界のいわば「披露」であったろう。前年までの静寂さとは打って変わり、祭りの飾りつけや各種のイベント、各国からの観光客で賑わう張家界であった。そんな中で、環境問題を軸にしたシンポジウムが企画の一つに加えられていたのは、「時代状況への配慮」を示したものであろう。「森林と人類文明、現代林業経済と生態学の使命」を内容とする Dr. W. G. Wunder<sup>15)</sup>の発言とともにシンポジウムの基調講演となった筆者の話題提供の内容は「日本の大衆レベルにおいて環境問題意識が抱かれるようになった文明状況、環境問題にとり組む「草の根運動」の思想と実践」であった。

開発に揺れる武陵源の本調査は、そのシンポジウムにおける発言が基底にある。調査を進めていく過程で、張家界をはじめとする「自然の宝庫」が、目先の利益を追う乱開発や、心ない観光客たちによって荒らされないことを願うだけであってはなるまい<sup>16)</sup>。武陵源の風光から無言の感化を受けて、「生物・環境」「自然・人工」を深く問い次代を見据えた地域開発のあり方と手

法を探るため、中国側の当事者たちと共感・共有できる視点と課題認識を得ることが、本調査の目的とされねばならない。

### 注

- 1) 平成元年度～2年度の文部省科学研究費（国際学術研究）補助金による。課題「中国湖南省における商品経済の浸透と農村の変容」研究代表者：足立原貫／研究分担者：春原亘（東京大学）、清成忠男（法政大学）、李龍雲（中国社会科学院）
- 2) 1979年から各級の基本調査が開始され、1982年からは、動物学、植物学、地質学、等の専門学者による自然科学各分野の資料蓄積のための調査研究が実施されている。（『大庸市覧』1991年版）
- 3) 平成4年度～5年度の文部省科学研究費（国際学術研究）補助金による。課題「中国湖南省武陵源区における地域開発に伴う農村の変容と環境問題」研究代表者：足立原貫／研究分担者：清成忠男（法政大学）、春原亘（新潟大学）、桂木健次（富山大学）、李龍雲（中国社会科学院）
- 4) この項目の調査に当っては、中国科学院長沙農業現代化研究所生態研究室長・王鶴生、武陵大学教授・严斧（植物学）、山形大学教授・桑原英夫（水文学）の各氏の協力を得た。
- 5) 武陵大学地質研究資料（1991年）
- 6) 張正祥・湖南省旅游局副局長（1992年10月、面接聴取、於・長沙）
- 7) 李龍雲（1993年）：「武陵源地域調査」中国社会科学院研究資料
- 8) 大庸市政府資料
- 9) 李龍雲（1993年）：同上
- 10) 張正祥・同上
- 11) 大庸市政府資料
- 12) 武陵大学生物学研究資料（1991年）
- 13) 住民（主として土家族・白族らの少数民族）は、みやげ物販売、かごかき、民族歌舞、などによって現金収入を急増させている。
- 14) 「環境ジャーナリストの会」会長、元・朝日新聞論説委員（『天声人語』担当）
- 15) 当時、在中国ドイツ大使館、林業アタッシュェ。
- 16) 1982年、張家界は中国の「国家森林公園」に指定された。1988年、張家界を核とする武陵源風景区は中国の「国家重点風景名勝区」の指定を受け、1992年には、ユネスコ世界遺産条約の「自然遺産」リストに登録された。